

第二十二番目の if = 「恩の形而上学」…「学位論文」流産の記

さて、処女作を書いた後に、三年ぶらぶらしていると、ある日突然西晋一郎先生からお手紙がきて、その内容たるや意外も意外、私に対して「学位論文を書くように…」とのことなり。然るに私は「学位論文」を書こうなどとは、文字通り夢想だにしたことはなかった。よってそのために私は広島へ赴き、親しく先生に対して自らの考えを申し上げた。然るに先生のお考えは牢固として変わらなかった。今ここに思えば、広島高師の学内事情も考えられて、母校に帰ると否とに拘わらず、とにかく学位をとって置けば、他日何かの役には立つだろうと、思召されての故であろう。とにかくも先生の御意志の不動なるを知り、私もついにその心してお宅を辞去したのである。

それは何年であったかは不明だが、私の数え四十二才の年の五月の半ばごろかと思う。そこで私は大阪に帰るや、直ちにそのつもりになって構想をまとめにかかり、かくしてその年の夏休みを幸い没頭して、ほぼ三十日間に一応一気に書き上げたものが、後に私の主著と言われる「恩の形而上学」である。そこでほっと肩の荷が下りた心地して、その事を西先生に御報告申し上げた。然るに先生からは、「学位論文というものは、その人が如何ほど学問したかが、何人にも分かるように博引傍証の要があり、思想的な考えということは、必ずしも第一の要件には非ず」云々のお手紙であった。

勿論このお手紙は、私の原稿をご覧になられた上にて書かれたわけではなかった。何となれば、私の論文は未だ一気に書き下したるばかりであって、浄書、否、一字の補訂だにしないまま、手元に置いたままであったからだ。されど西先生のこのお手紙によって、私には学位論文などというものは、全く無縁のものであることが判然となった。然るに西先生は、私が何とか学位論文を書くようにと、例えば「某博士に審査を依頼したから……」とまでも仰言って頂いたが、私としては学位を貰うために、心から信服していない人に、終生の頭の上がらぬ様なことは断じてすまいと思いついて、ついにせつかくの西先生のお奨めにも拘らず、何故お言葉に従わなかったかというに、その理由は唯一つ、私が心から尊敬する西先生にも西田先生にも、その様な博引傍証的な書物は一冊もなく、お二人とも学位は、推薦制度の廃止された最後の推薦学位であって、学位などというものは、本来かくあるべしと考えたが故である。(戦後の学位は、学界への通門パスにて、全く医学博士並みになった、何をか言わんや)

「学位論文」流産の顛末に付いては、上述によってそのあらまは察知していただいたと思うが、では私にとって、もしこの (if) が無かったとしたら如何。おそらくは私は、自らの形而上学的体系を持つに至らなかったであろうと思う。こう考えれば、この「恩の形而上学」の一書が、「学位論文」としては流産の憂き目を見たが、終生哲学の途を歩も

うとした私にとっては、文字通り不可避の一書であったというべく、かく考えれば「神天」の導きの如何に絶妙なるかを、そぞろに賛嘆を禁じ得ないのである。